

受け継がれる山蔭像

— 流布本系『鉢かづき』を中心に —

日 沖 敦 子

要旨 継母の策略によって、四辻に捨てられた鉢かづきは、入水自殺を図るが、鉢をかづいているために浮いてしまい死ぬことができず。山蔭三位の中將と出会うのは、そんな矢先のことだった。この山蔭三位の中將は、様々な文献にその名が確認できる藤原山蔭のことであると考えられる。山蔭三位の中將は、流布本系『鉢かづき』に登場し、鉢かづきのその後の運命に大きな影響を与える。鉢かづきは山蔭の邸の湯殿で下働きをし、山蔭の四男宰相殿と結ばれる。このような展開を踏まえると、『鉢かづき』の中での一つの転機が、この山蔭との出会いの場面であったと言っても過言ではないだろう。本稿では、〈亀の報恩譚〉〈継子譚〉を主要素とする山蔭説話の流れが、その後の室町時代物語にどのように繋がっていくのかを辿りつつ、『鉢かづき』に山蔭というキーパーソンを登場させることによって広がる物語世界を読み味わってみたい。山蔭説話の流れの中での『鉢かづき』の位置を確認した上で、『鉢かづき』と山蔭説話の比較を試みる。そこから導き出すことができる入水直後に

人間文化研究 2 二〇〇三年

鉢かづきが山蔭と出会うという物語展開について考察したい。
キーワード：山蔭説話、入水、亀の報恩、鉢

一 はじめに

鉢かづきのその後に大きな影響を与える出来事、それは「山蔭三位の中將」との出会いだった。鉢かづきが宰相殿（山蔭の四男）とめでたく結婚するという展開は、「山蔭三位の中將」との出会いがきっかけである。

御巫本系諸本、清水本を除く、流布本系『鉢かづき』諸本には、全て「山蔭三位の中將」の名前が確認できる^①。諸本の大部分を占める流布本系統で一致する山蔭という人物は一体どのような人物なのだろうか^②。

『尊卑分脈』『公卿補任』ともに『鉢かづき』に登場する「山蔭三位の中將」という人物は見つからない。山蔭の名が「藤原山蔭」のほかに見つからないことから、『鉢かづき』に登場する「山蔭三位の中將」は「藤原山蔭」を指すと考えて良いだろう^③。この「藤原山蔭」(山蔭中納言)という人物は実在したことがわかっている。

「藤原山蔭」は、総持寺の創建者^④、吉田神社の創建者として知られている。また、山蔭及び山蔭の子孫は、大嘗祭の「御浴殿事」に関与した人物としても知られ、多くの歴史書、日記などにその名が書き残

されている。これらを見ると山蔭の家柄は、六月・十二月の月次祭の夜に内裏神嘉殿西廂の御湯殿で行われる神今食の祭祀における、天皇の沐浴に奉仕する家柄であったことがわかる。

このように、山蔭には、様々な資料が残されている。本稿では、『鉢かづき』にこの山蔭が登場することの意味と効果について考えてみたい。

二 山蔭説話の流れと『鉢かづき』の位置 (資料参照)

山蔭の名は、山蔭説話でも広く知られている。この説話については、既に築瀬一雄氏^⑨、星田公一氏^⑩らの詳細な研究がある。山蔭説話に一貫して見られるのは、「亀の報恩譚」と「継子譚」の要素である。大筋は、亀が鶴飼によって殺されようとしているのを助けたことによって、自分の子どもが、継母・乳母の策略によって海に捨てられた際、その時の亀が子どもを助けたというものである。亀の報恩譚自体は決して珍しくないが、助けた亀が、助けた本人ではなく、その子どもを救うという型は多くない。山蔭説話がその代表的な例であろう。山蔭説話の内容は、各物語、説話集によって、寺社創建の由来に繋がっていくなどと、若干の違いはあるが、内容の大筋に違いはない。

山蔭説話は、亀を助けた人物、亀に助けられた人物の違いによって三系統に分類できる。『今昔物語集』『宝物集』『十訓抄』では、亀を助けたのは、山蔭であり、亀に助けられたのは、如無である。『平家

物語』『源平盛衰記』では、亀に助けられたのは、如無で『今昔物語集』と同じだが、亀を助けたのは「しにけるまことの母(存生の時)」となっている。『長谷寺験記』『三国伝記』『総持寺縁起絵巻』では、亀を助けたのは高房となっており、亀に助けられたのは山蔭となっている。『今昔物語集』系統と、一世代のずれが生じている。『尊卑分脈』によれば、高房は、山蔭の父であり、如無は山蔭の子であることがわかる。このようなずれは何を意味するのだろうか。紙数の都合上、詳細を省くが、各系統の特徴をここでは簡単にまとめておきたい。

(一) 〈山蔭・如無〉型

山蔭説話の初出は『今昔物語集』である。この系統に属するのが〈山蔭・如無〉型であり、『宝物集』『十訓抄』が挙げられる。これらと比較すると、『宝物集』『十訓抄』が、かなり簡潔であることに気がつく。山蔭の夢に亀が出てきて、継母によって子どもが海に落とされたことを語る場面、如無の名前の由来、継母への如無の孝行、山蔭が総持寺を建立したことなどは、『宝物集』『十訓抄』には書かれていない。『宝物集』『十訓抄』で、『今昔物語集』の内容が簡略化されているのは、おそらく、各々の前後の話が報恩譚であり、その流れが影響しているためと考えられる。

『今昔物語集』には、総持寺創建の由来が書かれているが、僅か一行「此ノ山蔭ノ中納言ハ撰津ノ国ニ総持寺ト云フ寺造タル人也トナム語り伝ヘタルトヤ」と補足的に書かれているのみである。説話

の主旨がそこにあつたとは考え難い。『宝物集』『十訓抄』では、総持寺創建に関する記述は全く見られない。そのかわりに書かれているのが、如無が後に僧都になつたということである。この点は〈実母・如無〉型にも共通し、『源平盛衰記』は、『今昔物語集』以降書かれていなかった如無の名前の由来について書かれている点でも注目できる。子を如無とする方は、如無の出世、功績を説くことを重視しているといえる。

(二) 〈高房・山蔭〉型

〈山蔭・如無〉型にやや遅れて〈高房・山蔭〉型を確認することができる。『長谷寺験記』『三国伝記』『総持寺縁起絵巻』などがこの系統に属する。その特徴は、総持寺創建を説くことに重点が置かれていることである。この系統では、〈継子・動物報恩〉という要素は、総持寺創建の由来を説くにあつたての動機のようなものに過ぎない。山蔭が総持寺を建立したことは、『今昔物語集』にも見られる。しかし、『今昔物語集』の総持寺建立についての記述は、先に述べたように僅か一行のみであつた。

『今昔物語集』『宝物集』『十訓抄』が〈山蔭・如無〉型であるのに対して、『長谷寺験記』『三国伝記』『総持寺縁起絵巻』が〈高房・山蔭〉型であるのは、亀の報恩説話や、継子型の説話であることよりも、総持寺創建の由来を説くことにその主たる目的があつたためと考えられる。〈高房・山蔭〉型に共通して見られる場面として、父高房が悲

しみ、子の無事を観音に祈念する場面がある。九一二年四月八日の「総持寺鐘銘」(『朝野群載』)に、総持寺は山蔭が、父高房の意思を受け継いで創建したということが既に書かれており、総持寺創建の由来を説くには、高房の宿願(山蔭の無事を観音に祈る場面)が必要だつたのだろう。そして、結果として〈高房・山蔭〉型という一つの流れが定着したと考えられる。

〈高房・山蔭〉型、〈山蔭・如無〉型という一世代のずれが生じ、それぞれの説話が成立した背景には、その説話が何を目的として誕生してきたかという説話の成立目的の違いがあつたと考えられる。

(三) 〈実母・如無〉型

それでは、〈山蔭・如無〉型の変型と考えられる〈実母・如無〉型は、どのように生じてきたのだろうか。〈山蔭・如無〉型と〈実母・如無〉型は、如無が亀に助けられるという点で共通している。中でも、時代的に近い〈山蔭・如無〉型の『十訓抄』と、〈実母・如無〉型の『平家物語』『源平盛衰記』は、烏帽子の話が書かれている点でも共通している。『十訓抄』の烏帽子の話に次に引用する。

昔、宇多法皇大井河ニ幸ノ日、泉大将(定国藤内大臣子)と横レに注有リ)ノ烏帽子オトシタリケルニ、如夢僧都(中納言山蔭子)と横レに注有リ)三衣箱ヨリ取出タリケンニ、ヲトラスコソ聞

『平家物語』『源平盛衰記』に見られる烏帽子の話の方が詳しい。『平家物語』では、清盛死去のところで、清盛と関わる人々の記述が続き、その中の一人として邦綱が出てくる。邦綱はよく気がきく人物として知られ、出世した人物で、清盛の友人として登場する。その例として、石清水八幡の御幸の際、神楽の長が水に落ちて装束が台無しになってしまい、そこでさつと替えの装束を出したのが邦綱だった、この邦綱は山蔭の子孫だった、という形で山蔭の名前が出てくるのである。さらに、山蔭の子である如無も替えの烏帽子を出したという話が伝わっていることをいい、山蔭説話（亀の報恩説話）へと繋がっていく。『十訓抄』『平家物語』『源平盛衰記』は、烏帽子の話を入れることで、如無の功績をたたえている。如無の功績をたたえる点で〈実母・如無〉型と〈山蔭・如無〉型は共通している。

〈実母・如無〉型は、「めいどの母（亡母）」が、かつて助けた亀によつて如無が助けられるというパターンである。亡母は、継母と対極に位置する存在である。〈実母・如無〉型は、「亀」という要素を、動物報恩の意味として登場させるばかりでなく、そこに亡母を重ねる（亡母がかつて助けた亀）ことで、母と子の結びつきを思わせる新しい形体を生み出した。〈実母・如無〉型は、亡母を登場させることにより、継子物語としての性格をいっそう強め、室町時代の継子物語に影響を与えていくこととなるのである。

三 山蔭説話と室町時代物語

室町時代物語『秋月物語』と『鉢かづき』に山蔭の名が確認できる。『秋月物語』は、大筋は『住吉物語』とほぼ同じである。山蔭の名が見られるのは、継母が召使と図つて悪人たちに姫君を盗み出させ、姫君を紀伊国の沖から海に投じさせるが、亡母が大亀となって現われ姫君を救うという場面である。

さて姫君をは、かめの、かしらのせたてまつりて、しまにさし上げる、さて姫きみ、いかなる事そと、御らんすれば、かめ、てあわせて、なくけしきにて、かへりける、は、君の、たすけ給ふかや、あらありかたや、むかしの、山かけの中なこん、わかきを、かやうにあるとかや、いよく御きやうたつとく、あそはしける、かやうにあるとかや、いよく御きやうたつとく、あそはしける、姫きみを、たすけ申つるかめは、こせのは、きみ成とて、かきけすやうに、うせ給いけり^②

この「むかしの、山かけの中なこん、わかきを、かやうにあるとかや」が指す山蔭説話は、おそらく〈山蔭（実母）・如無〉型であると考えられる。「むかしの、山かけの中なこん、わかきを」という表現自体は曖昧で、父親山蔭を指すのか、子ども山蔭を指すのかはっきりしないが、『宝物集』（第二種七卷本系）に「山蔭の中納言と申ける人

の、わかゞりける時」とあり、これと同型と考えてよいだろう。また、『秋月物語』の内容を考えると、継子物語の要素が強く、寺社建立に繋がるような部分は見られないので、『秋月物語』は〈山蔭(実母)・如無〉の流れの上にあると考えられる。特に、亡母が「大亀」となつて救うという展開は、『平家物語』『源平盛衰記』の〈実母・如無〉型との繋がりをおぼやせる。

亡母が亀となり、子を助けるといふ設定は、『秋月物語』だけでなく、『ふせや物語』にも見られる。主人公であるにほひの君は、継母の策略で武士らによつて琵琶湖に沈められるが、亡母の魂の宿つた大亀に救われ、瀬田の橋の上のうちあげられる。また、室町時代物語『はにふの物語』は、継子物語ではないが、瀬田の橋から入水し、大亀の甲羅に乗せられて浮かんでいるところを三井寺の法師たちに救われたという稚児が出てくる。先ほどから、「瀬田の橋」という場所が入水の間として度々出てくるが、室町時代物語『転寝草紙』も同じである。亀は出てこないが、恋する人への思い余つて後世の契りを祈り、瀬田の橋から身を投げるのである。しかし、結局舟遊びの舟に助けられる。興味深いのは、同じ入水であっても継子物語の場合は、人ではないものが姫君を助けるというケースが目立つ。特に、それは亡母に繋がるものであることが多い。『鉢かづき』の「鉢」、『秋月物語』『ふせや物語』の「大亀」、『月日の本地』の「大鳥」などである。

『鉢かづき』は、鉢を被っていたために沈まなかったが、鉢が浮いているのを見て川から引き上げたのは、舟人だった。『鉢かづき』の

「鉢」は亡母によつて被せられたものであるが、本文の中で入水した姫君を助けた鉢が亡母(亡母の魂の宿つたもの)だったという記述は見られない。この点で、『秋月物語』『ふせや物語』の「大亀」や『月日の本地』の「大鳥」とは異なっている。

母の励ましは形のあるものとは限らない。室町時代物語『朝顔の露』は入水ではなく、吉野の山に棄てられるが、亡母の夢に励まされるという設定である。また、『岩屋』では、亡母の霊が姫君を励ます(亡母の霊が継母にとりついて苦しめる)という設定である。いずれにしても、室町時代物語の継子物語に描かれている母と子の絆は、母の死後も途絶えることのない、深い絆なのである。

室町時代物語の継子物語を大雑把に見てきたが、『秋月物語』に「山かけの中なこん、わかきを、かやうにあるとかや」とあることは、『秋月物語』に山蔭説話が少なからず影響を与えていたことを意味する。『秋月物語』で、姫君の危機を亡母が大亀となって助けたという話の展開は、『平家物語』の実母が存生の時に助けた亀に如無(子)が助けられるという話の展開に近い。違いは、亀自体が母であるか否かである。室町時代物語の成立年ははっきりしないため、室町時代物語に影響を及ぼした型が〈実母・如無〉型であるとは断言できない。しかし、〈実母・如無〉型と室町時代物語(『秋月物語』)の間には、影響関係があると考えられる。

〈亀の報恩譚・継子型〉の山蔭説話は、一方では寺社縁起を説くねらいをもつた〈高房・山蔭〉型として広がり、もう一方では、如無の

出世を説く〈山蔭・如無〉型として広がった。『十訓抄』『平家物語』『源平盛衰記』で烏帽子の話を加え、如無の功績をたたえる傾向は更に強まる。それ以後は、「如無僧都の話」として広がるのではなく、『平家物語』で、亀を助けたのが亡母であったことを契機として、〈実母・如無〉型ができ、その流れは継子物語の要素を強め、室町時代物語の中へ取り込まれていく。こうして、〈山蔭・如無〉型の山蔭説話は、室町時代物語の中へと発展的継承を遂げていったのである。

四 『鉢かづき』と山蔭説話の比較

鉢かづきが「山蔭三位の中將」と出会うのは、入水自殺を図るが、鉢のために死にきれず、ふらふらとさまよい歩いていた矢先のことであった。先に検討してきた山蔭説話を踏まえたうえで、『鉢かづき』を読むと、入水自殺未遂の後に山蔭が登場するという設定が実に興味深い。鉢かづき入水後、山蔭に出会うという展開は、流布本系諸本で一致する。入水後の山蔭との出会いは、継母の策略によって、海に落とし入れられた子（山蔭）が亀によって助けられるという山蔭説話（〈高房・山蔭〉型）を連想させるのである。鉢かづきが、入水するきっかけも、もともとは母を失い、母に被せられた鉢は頭から離れず、継母の策略によって四辻に捨てられ、というそれまでの経緯を考えると、山蔭説話と『鉢かづき』は、継子いじめ（継母の策略）の結果、入水に至るといえる、同じパターンの継子物語同士であるといえる。

『鉢かづき』の入水のモチーフは、「山蔭三位の中將」との出会いの直前に設定されることで、享受者に山蔭説話を連想させるという効果があり、『鉢かづき』の書き手も、そのことを少なからず意識していたのではないだろうか。

さて、入水のモチーフのほかにも、『鉢かづき』と山蔭説話の共通点はいくつか見つけることができる。『鉢かづき』と山蔭説話の共通点（⑨のみ相違点）を挙げると次のようになる。

① 『鉢かづき』…亡母の手によって「鉢」が被せられる（観音の示現）。

「山蔭説話」…父（高房・山蔭）または亡母により「亀」が助けられる。

② 『鉢かづき』…鉢かづき、継母の策略によって四辻に棄てられる。

「山蔭説話」…子（山蔭・如無）、継母・乳人の策略によって海に棄てられる。

③ 『鉢かづき』…鉢かづき、自ら入水する（御巫本では関白殿「他本で山蔭にあたる人物」によって海に棄てられることになっている。）

「山蔭説話」…（継母によって海に棄てられる）

④ 『鉢かづき』…鉢のために浮いてしまい死ぬことができない。

「山蔭説話」…亀の報恩（子を助ける）「亀」高房、山蔭、亡母の力

⑤『鉢かづき』…鉢かづきは長谷の申し子である（明らかに書かれて

いるのは御巫本と赤木文庫蔵本〔写本〕）

「山蔭説話」…父高房が観音に祈念する場面がある（『長谷寺験記』

『三国伝記』『総持寺縁起』）

⑥『鉢かづき』…幸福な結婚、父との再会（御巫本では父との再会は

書かれていない。）

「山蔭説話」…亀に助けられて父と再会／（高房・山蔭）型↓総

持寺建立の由来を説く／（山蔭・実母）型↓如無

は後に僧都となったと説く

⑦『鉢かづき』…継母に孝を尽くしたとは書かれておらず、継母は報

われない生涯を送ることになる。

「山蔭説話」…『今昔物語集』のみ、如無が継母に孝を尽くしたと

ある。

⑧『鉢かづき』…（継子・観音信仰）

「山蔭説話」…（動物報恩・継子・（観音信仰））

⑨『鉢かづき』…亡母によって頭に箱がのせられ、その上に被せられ

た鉢は、嫁くらべの明け方かっぱと落ち、中からは

多くのもの（嫁入り道具）が出てきた。

「山蔭説話」…亀は命を助けるのみ。

鉢かづきが「鉢」によって助けられたと考えるならば、『鉢かづき』の「鉢」は、「山蔭説話」の「亀」にあたるといえる。物語全体

を通じて姫君を保護し守りつづけた「鉢」は、入水の場面で決定的な

大きな役割を果たす。それは「亀」と同様、子の命を救うというもの

であった。『鉢かづき』の「鉢」と山蔭説話の「亀」の違いは、命を

助けるのみか、命を助け、物質的恵みをもたらすかの違いである。

この違いは、おそらく『鉢かづき』の結末が、幸福な結婚であったこ

とに關係すると思われる。如無が継母（乳母）の手によって、海に突

き落とされたのに対して、鉢かづきは自ら入水する点も大きな違いで

ある。この点は、山蔭説話が室町時代物語の中に取り込まれ、変形し

ていった結果であると考えられる。継母に突き落とされたという展開

よりも、自ら入水するという展開のほうが、継子のつらさ、哀しさが

享受者に一層よく伝わり、継子の悲劇性を高めるといふ効果もあつた

のではないか。

五 山蔭と鉢かづき

山蔭は、宰相殿の鉢かづきへの想いと、鉢かづき自身をどのように見ていたのだろうか。このことについて考えられる場面は、五箇所見つか

る。Ⅰ中將殿は御覧じて、「鉢かづきはいづくへぞ」とのたまへば、「い

づくともさして行くべき方もなし。母に離れ候うて、結句、かかる片端さへつき候へば、見る人ごとにおぢ恐れ、憎がる人は候へど

も、あはれむ人はなし」と申しければ、**中将殿**きこしめして、「人のもとには不思議なる者のあるも、よきものにて候ふ」とのたまへば、仰せに従ひて置かれける。さて、「身の能は何ぞ」とのたまひければ、「何と申すべきやうもなし。母にかしづかれし時は、琴、琵琶、和琴、笙、箏、古今、万葉、伊勢物語、法華經八卷、教の御経ども読みしよりほかの能もなし。」さては、能もなくは、湯殿に置け」とありければ、いまだならはぬことなれど、時に従ふ世の中なれば、湯殿の火をこそ焚かれける。

II また、**舅御前**仰せけるは、「いづくへも行かずして、ただ今恥をかへきことの悲しさよ。何しに嫁合などと言はずとも、よきも悪しきも知らぬ体にて置くべきものを」と仰せける。

III さるほどに、御座敷一段下りて、こしらへたる所に直らんとし給ふ時に、**舅三位の中将殿**、「いかで天人の影向を下座に置くべき」とて請じさせ給ふ。

IV **三位の中将殿**おぼしめしけるは、このほど、宰相の君、絶え入り思ひつることこそ理なれとおぼしめしける。

V さるほどに、また御盃出でければ、**舅御前**きこしめし、姫君に御さしありて、「御さかな申さん」とて、「わが所領七百町とは申せども、二千三百町の所なり。一千町をば姫君に参らす。また一千町をば宰相の君に取らすべし。残る三百町をば三人の子どもに取らするなり。百町づつ分けて取れ。これを不足に思ふ者あらば、親とも子とも思ふべからず」と仰せければ、兄御たちきこしめし、合はぬ

こととは思へども、貴命なれば力なし。今よりしては、宰相の君を総領と思ふべしと、三人同心し給ひけり。

山蔭は、鉢かづきを追い出したり、苛めたりする人物としては書かれておらず、むしろ、「不思議なる者のあるも、よきものにて候ふ」と、邸にとどめ、仕事を与えている。冷泉の提案で、北の方が計画した嫁比べに対しても、「何しに嫁合などと言はずとも、よきも悪しきも知らぬ体にて置くべきものを」と否定的である。北の方や冷泉など周囲の人々が、鉢かづきを、次々と窮地に追い込むのに対して、山蔭はむしろそれらの人々とは逆の対応をしている。「不思議なる者」である鉢かづきを邸に迎え入れ、仕事を与え、嫁合わせに対しては「知らぬ体にて置くべき」と考え、姫君の鉢がとれて以後は、姫君を「天人」と評価し、宰相殿の思いも「理なれ」と思い、多くの財産を与える。山蔭は姫君の影の支援者であった。「不思議なる者」を邸にとどめ、邸から追放（嫁比べ）することに否定的な人物として（亀の報恩譚）（継子譚）の要素を持つ山蔭説話の主人公である、山蔭が登場することは興味深い。継母（又は乳母）によつて海へ捨てられるが、亀に助けられるという不思議な体験をした山蔭が、「不思議なる者」である鉢かづきを邸に留める。室町時代物語では決して珍しくない物語の展開が、山蔭という固有名詞により、解釈に面白さが生まれる。

六 おわりに

本稿では、鉢かづきのその後に影響を与えた人物、山蔭に注目した。確かに、御巫本系諸本では山蔭の名は見られない。しかし、御巫本系諸本には、鉢かづきが自ら入水する場面もないのである。流布本系諸本に、鉢かづきが自ら入水するという場面が見られ、その直後に山蔭との出会いが設定されていることは、決して無関係ではない。そこには、説話世界を中心に、脈々と受け継がれてきた山蔭像をみる事ができる。本稿ではふれなかったが、鉢かづきが下働きをする「湯殿」という場合も、山蔭の邸の湯殿と設定されることによって、単なる下働きという、よく使われる物語展開という解釈に留まらない特別な意味を持つこととなる。⁽⁶⁾

『鉢かづき』が、いかに室町時代、及びそれ以前の物語や説話を享受し、物語世界に展開させていったのかについて考えることは、『鉢かづき』の書き手の思考は勿論、当時の享受者がどのように享受したかを考えることにも繋がっていくはずである。(ことば)の選択には、書き手の意図が働く。それぞれの(ことば)の真意を問うことは、書き手の意図を問うことに繋がる。そして、その時代の変化を捉えることにも繋がっていくはずである。

〔注〕

(1) 渋川版「山蔭の三位中将」／慶応本「やまかけの三みちうしやう」／赤木本(写)「山かけの三みのちうしやう」／赤木本(版)「山かけのさんみ中将」／高橋本「山かけの三位中将」／松會本「山かけの三みのちうしやう」／早稲田本「山かけのさんみ中将」／御巫本「大しやうのくわんはく殿」／清水本「三みのちうしやう殿」

(2) 御巫本(「大しやうのくわんはく殿」)、清水本(「三みのちうしやう殿」)には、「山蔭」の名は見られない。御巫本、清水本は、位のみのものであるが、流布本系統には、位のみならず、具体的な「山蔭」という名が挙がっている点は注目に値する。

(3) 「山蔭」の位を、「中将」とするのは、『義経記』、『鉢かづき』の他に、『臥雲日件録抜尤』(寛正五「二四六四」年四月十五日条)に「伊達乃山陰中将齋」とあり、伊達晴宗の法語「藤原末裔、風流太守、不墜家業、山陰中将開關洪基」など、伊達氏の由緒を説く資料の中に「山陰中将」の名を見ることが出来る。伊達氏と山蔭の関わり(伊達氏は山蔭の末裔であるという資料が多く残されている)については、黒嶋敏氏(「伊達氏由緒と藤原山蔭」、『日本歴史』五九四号、吉川弘文館、一九九七)を参照。これらの文章で、同一人物を指すにもかかわらず、「山陰中将」「山蔭中納言(藤原山蔭)」の両方が見られることから、『鉢かづき』の「山陰三位の中将」も「藤原山蔭」を指すと考えられる。伊達氏に関係する文献を除いて、『義経記』と『鉢かづき』の他に「山蔭」の位を「中将」とするものは見当たらない。「山陰中将」の呼称は、室町時代頃出てきたものか。『平家物語』(百二十句本「片仮名本」)に「山陰中将納言」と書

受け継がれる山蔭像

かかれている。書き誤りか、それとも「山蔭中将」と「山蔭中納言」を混同したか。

- (4) 山蔭／從三／民部卿／中納言／母同生丘（藤原眞夏女）／仁和四二四薨（『尊卑分脈』）
- (5) 延暦十二年（九一二）四月八日の「総持寺鐘銘」（『朝野群載』）によると、山蔭が父高房の意志を受け継いで、入唐使の大神御井に頼んで、かの地で白檀の香木を求めてもらい、これを用いて千手観音を造像し攝津国に安置したのが始まりとされている。
- (6) 貞観年間（八五九〜八七七）山蔭一門の氏神として吉田神社を創建した。『大鏡』（道長上）「藤原氏の氏神の由来」には、「この吉田の明神は山蔭の中納言のふりたてまつりたまへるぞかし」とある。
- (7) 『日本三代実録』『中右記』『江次第抄』『江家次第』『醍醐天皇御記』『助無智秘抄』『建武年中行事』『永和大嘗會記』『蓬萊抄』など。
- (8) 梁瀬一雄「山蔭中納言物語考」（『説話文学研究』三 弥井書店、一九七四）
- (9) 星田公一「今昔物語集の山蔭中納言説話の形成と影響」（『同志社国文学』九、一九七四）「山蔭中納言説話の成立」『長谷寺験記』の場合」（『同志社国文学』十一、一九七六）
- (10) 『菅家文草』（第十二「為藤相公、亡室周忌、法會願文。元慶八年二月十二日」）に、藤原山蔭の亡き北の方の周忌に当たり、供養した時の願文があり、その中に「……弟子亦嘗作念曰、弟子年之少壮、祇侍所天。每随遠近於分憂、無禁荒淫於取樂。或結網垂釣、殺昔弟兄。或走犬飛鷹、傷前君父。如是等罪、無量無邊。……」とある。『菅家文草』（日本古典文学大系）の注が「漁狩・鷹狩で殺生した罪を懺悔する条は興味がある」

と指摘するように、殺生の罪への懺悔と、亀の報恩説話である山蔭説話の共通性は興味深い。これらの関連性については今後の課題としたい。

- (11) 泉基博編『十訓抄上』「片仮名本」古典文庫
- (12) 横山重・太田武夫校訂『室町時代物語集 第三』p.171・172（一七三）矢野利雄氏蔵写本。『秋月物語』では「めいと母」が亀として登場するが、『鉢かづき』では亡母は一切姿を表さない。
- (13) 星田公一「今昔物語集の山蔭中納言説話の形成と影響」（『同志社国文学』九、一九七四）
- (14) このほかにも「瀬田の橋」は、室町時代物語『美人くらべ』に出ている。
- (15) この点に関しては『鉢かづき』御巫本、清水本も一致している。鉢が母だったというような記述は見られない。
- (16) 菅野扶美「山蔭中納言ノート」（『梁塵 研究と資料』一、一九八三）、保立道久『物語の中世』（東京大学出版会、一九九八）参照。
- *本稿では、御巫本（旧御巫清男氏蔵）系統ほか、清水泰氏蔵本についても、流布本系統と別に扱う。特記しない限り、本稿での『鉢かづき』は、流布本系（渋川版系）を指すものとする。流布本系引用テキストとして、『御伽草子集』（小学館、一九七四）を利用した。確認した流布本系諸本は次のとおりである。慶應義塾大学蔵（写本）、赤木文庫蔵本（写本、寛永刊絵入大本）、万治二年高橋清兵衛刊本、御伽文庫本（横三冊）、渋川版。御巫本系統は、旧御巫清男蔵本ほか、角屋保存会蔵本、石川透氏蔵本、京都大学附属図書館蔵本を参考にした。

(資料)

	今昔物語集 巻19-29	宝物集 (9冊本) 7	十訓抄 巻1-5	長谷寺験記 下-13	三国伝記 巻7-27	総持寺縁起絵 巻(海北友雪)
亀を 助けた時	一ト年住吉ニ 参リタリシニ	山陰の中納言 と申ける人の わかゝりける 時		(高房)西国ニ 所知有テ、子 孫山陰ノ中納 言ノ幼少ナル ヲ相具シテ鎮 西ヘ下向セシ 時	(中納言)四才 の時 (父)高房具足 シテ鎮西ニ所 知アリテ下向 シケル時	大宰大貳に任 して鎮西ヘ下 向の時
亀を 助けた場所	大渡ト云フ所 ニシテ	桂川	筑紫ヘ下給ケ ル道ニ	淀ノ穂積ノハ シノ本ニ(一 人ノ鶴飼〜)	淀ノ穂積ノハ シノ下ニ(一 人ノ鶴飼〜)	淀のわたり穂 積を過侍しに (鶴飼とも集 て)
亀を 助けた人	藤原ノ山陰	山陰の中納言	山陰中納言	藤原ノ朝臣高 房	藤原朝臣高房	藤原高房
亀に 助けられた時	中納言太宰ノ 帥ニ成テ鎮西 ニ下ケル(鍾 ノ御崎ト云フ 所ヲ過ル程 ニ)	太宰の大貳に 成て下りける に	(筑紫ヘ下給 ケル)其後	(河尻の津に 宿ス)ソノ暁 (船ヲ出スニ)	(河尻の津に 宿ス)其の暁 (船ヲ出ニ)	其夕つ方河尻 に宿り給ふ。 (翌日の朝方 海に落ち、そ の日のうちに 亀に助けられ る)
亀に 助けられるこ とになったき っかけ	継母此ノ児ヲ 抱テ、尿ヲ遣 ル様ニテ取り ■タル様ニテ 海ニ落シ入レ ツ	まゝ母、三に なりける若君 をあやまの やうにて海に おとし入てな きかなしみけ る	継母乳ノ者 (母)ニ心ヲ合 セテトリハツ シタルアヤマ チノヤウニテ 海ニオトシ入 ツ	乳母継母ノカ タラキヲ受テ 最愛ノ一男山 陰中納言ヲ海 中ニ入	乳母継母ノ語 ヲ受テ此ノ山 陰ノ中納言ノ 幼少ナルヲ海 中ニ落シ入 リ。	(乳母涙に溺 たる躰にて申 す様)「さ候へ ハこそ今朝船 へ抱き奉て少 用を構ると て、あやまち て水に落し入 奉て悲歎の餘 にかくとたに …」…是は■ 継母のかたら ひによりて心 をあはせかく のこごとく有 れとかや。
亀に 助けられた人	如無	如無僧都	若君(如無)	山陰ノ中納言	山陰中納言	山陰中納言
話型	継子 動物報恩	継子 動物報恩	継子 動物報恩	継子 動物報恩	継子 動物報恩	継子 動物報恩
その他	山陰の夢に亀 が出てくる。 継母によって 子が海に落と されたことな どを亀が夢の 中で語る。如 無の名前の由 来を説く。継 母に子がな かったため、 如無が孝行し た。山陰が総 持寺を創建し たと語り伝え ている。	若君のその後 が書かれている。 法師となった 後は僧都にま でなった。 (如無の名前 の由来につい ては書かれて いない。)	文末に如無僧 都の脇に山陰 中納言とある。 両者の物語と して伝えられ たということ か? 如夢は「夢」 となってお り、「無」では ない。	総持寺建立の 由来を説く。 (由来が山陰 説話) 亀を助けた時 と亀が恩返し する時の時間 差が少ない (二日間の出 来事として書 かれている)。 父高房が観音 に祈願する場 面有り。総持 寺は高房の宿 願を果たそう と山陰により 建てられたと する。	長谷寺験記、 総持寺縁起と 類似した内容 (総持寺建立 の由来を書い ている)→由 来の話として 、亀説話が 挿入される。 亀を助けた話 から、毛宝の 説話へ繋げて いる(毛宝の 例は総持寺縁 起、源平盛衰 記にある)父 高房が観音に 祈願する場 面有り。	長谷寺験記、 三国伝記と類 似した内容 (総持寺建立 の由来を書い ている)→由 来の話として 、亀説話が 挿入される。 亀を助けた話 から、毛宝の 説話へ繋げて いる(毛宝の 例は総持寺縁 起、源平盛衰 記にある)父 高房が観音に 祈願する場 面有り。

	平家物語 巻6	源平盛衰記 巻26	久修園院縁起	直談因縁集 8-16	東西歴覽記	古物語類字抄 也部 290
亀を 助けた時	しにけるまこと の母存生の 時	天王寺詣の時	清和天皇の御 宇貞觀之比… 鎮西へ下向の 時	陽成院ノ御時 …鎮西ニ所領 持玉フ間、下 レリ。時、	太宰ノ任ニ下 向ノ時	
亀を 助けた場所	かつらのうか ひが鵜の餌に せんとて	渡辺の橋の辺	淀の河すえ穂 積乃橋の許	宇治橋ニテ	淀河ノ辺、穂 積ノ橋	
亀を 助けた人	しにけるまこ との母(存生 の時)	此若君の御母 御前	藤原高房	高房	高房	山蔭中納言
亀に 助けられた時	父山蔭中納言 太宰大式にな (ッ)て鎮西へ くだられける 時	太宰大式にて 下給けるが	河尻の津丹宿 す時	高房、鎮西へ 下り玉へハ		如無僧都の、 をさなかりし 時
亀に 助けられるこ とになったき っかけ	継母にくんで あからさまに いやくやうに して海におと し入るさん としけるを	乳母いかゞは したりけん取 弛て海中へ落 し入る	婦母の女房継 母の話う希 て最愛の一男 山蔭中納言を 水中へ墮入連 偽てあやまて る気色也	継母喜テ、四 才ニ成玉フ所 御子ヲ、メノ トニ仰付、海 敷河へ沈候へ 云云。口惜存 レトモ、セウ ノ仰ナレハ、 河へ投入ル 也。	偶々舟ニテ、 高房ノ幼子ヲ 乳母誤テ海へ 落ス、悲ミ限 ナシ	継母悪みて、 海に落し入り し
亀に 助けられた人	如無僧都 (助無僧都)	如無僧都	山蔭の中納言	山蔭ノ中納言	中納言山蔭卿	如無僧都
話型	継子 動物報恩	継子 動物報恩	継子 動物報恩	継子 動物報恩	継子 動物報恩	継子 動物報恩
その他	如無とも助無 とも書いている。 亀を助けたの が亡母(実母) となっている。	山蔭の夢に亀 が現れ、話を する(亡母御 前が亀を助け たことや継母 乳人により若 君が海に落と し入れられた こと) 亀を助けたの は亡母御前。 如無の名前の 由来を説く。 如無が帝に重 んぜられたこ とを書いている。 毛宝の説 話有り。	久修園院、総 持寺建立につ いて。 七男七女。 亀→吉凶を相 すること 行基 聖徳太子	四歳になる御 子。 七男七女。 長谷へ参り、 最初に会った 人に作らせよ という展開。 →童子(仏師 は行基菩薩 か?) →十一面観 音 像できる (続古事談に 類話あり)	「高房衣にカ ヘテ」(「しに けるまことの 母」の場合と 同じ)。山蔭が 亀井寺を建立 したこと。 総持寺、吉田 神社について も書かれている。 (亀井寺を 建立した人物 が峯相記と異 なる)	

受け継がれる山蔭像

一一一

(研究紀要編集委員会は、編集発行規程第5条に基づき、本原稿の査読を論文審査委員会に依頼し、本原稿を本誌に掲載可とする判定を受理する、二〇〇三年十月二十三日付)。

	発心集 巻6-4	沙石集(東大本)第8	峯相記
亀を			
亀を		河尻	
亀を 助けた人	山陰中納言の うへ	山陰ノ中納言	山陰中納言
亀に 助けられた時			所領ニ付テ筑 紫へ下ラレケ ルニ
亀に 助けられるこ とになったき っかけ		海ニアヤマチ テオチ入テケ ルヲ	彼ノ愛子ヲ継 母アヤマレル 由ニテ海底ニ 沈ントス
亀に 助けられた人	(如無か)	(如無)	如無僧都
話型		動物報恩	継子
その他	「かの山陰中 納言のうへに は、たとへも なかりける母 の心かな。」 という一文の み。		亀井寺建立の 由来を説く。 如無出家して、 如無僧都となる (高貴な僧だっ た)。→亀井寺 で仏法を行った。 亀井寺を建立し た人物が東 西歴史記と異 なる